

梅棹忠夫著「知的生産の技術」を読む

- 知識社会に備えよう -

- ◆ 研究といっても、それを構成要素となっている具体的な作業にまで分解してみると、けっきょくは、よむ、かく、かんがえる、などの動作に帰着するのであって、一般の「勉強」となにもかわらない。  
まえがき )
- ◆ おしえる側よりもならう側に、それだけの積極的意欲がなくてはなにごとにも上達するものではない。
- ◆ うけ身で学問はできない。学問は、自分がするものであってだれかに教えてもらうものではない。
- ◆ みずからまなぶこと。
- ◆ もし、学校において、教師はできるだけおしえまいとし、学生はなんとかして教師から知恵をうばいとしてやろうとつとめる、そういうきびしい対立と抗争の関係が成立するならば、学校というものの教育的効果は、いまの何層倍かにのぼるのではないか。P.1 ~ 2
- ◆ 知的生産というのは、頭をはたらかせてなにかあたらしいことがら— 情報 —をひとにわたるかたちで提出することなのだ。(情報というのは、なんでもいい。知恵、思想、かんがえ、報道、叙述、そのほか、十分ひろく解釈しておいていい。) P.9

梅棹忠夫著「知的生産の技術」岩波新書

岩波書店 1969年7月21日刊

- 2006年9月14日記 -